

結晶母

2011年9月号

発行日：2011年09月15日

「結晶ができる時、最初に生まれる結晶。それが結晶母。結晶母の周りに同じ形をした元素が集まって、ひとつの大きな結晶をつくる。ひとつひとつの結晶は小さくても、結晶母を中心に集まった大きな結晶のネットワークは強く、たくましい！そんな大事な結晶母の役割を、地球に住むひとりひとりが果たせたら・・・」そんな願いを込めて、名付けました。



ウガンダから送られてきた物資を手渡す小川とトシャ

特定非営利活動法人テラ・ルネッサンス 創設者 鬼丸昌也

2011年3月11日。

その日、テラ・ルネッサンスに一本の電話がありました。ウガンダ事務所職員のトシャ・マギーから、『テラ・ルネッサンスは、被災者のために何をするの。ウガンダでは、職員や元子ども兵たちで募金を集めたわ』という内容に、驚かされた。

誰もが、誰かのために役立ちたいと思っています。海外支援の経験を、被災地で活かすべく、テラ・ルネッサンスは新しい挑戦を始めたのです。

目次：

p2-3 ともつな事業報告

p4-5 カンボジア事業報告

p6-7 ウガンダ・コンゴ事業報告

p8 ふえいす to ふえいす

【ともつな】事業の歩み

2011/03/12	被災者支援を決定、公式ブログにて声明を発表
2011/03/14	公式ウェブサイトにて、募金の呼びかけを開始、海外事務所の職員からのメッセージをウェブで紹介
2011/03/15	提携先である被災地 NGO 協働センターへ 100,000 円を寄付
2011/03/16	【物資提供】がんばろう茨城！ 学生ボランティアチームより連絡が届き、協力を約束
2011/03/18	【物資提供】茨城県北茨城市あての物資買い付け開始
2011/03/19	【物資提供】がんばろう茨城！ 学生ボランティアチームより必要物資リスト到着
2011/03/22	「ともつな基金」特設サイトオープン、新たにクレジットカードからの寄付機能を追加
2011/03/22	【物資提供】茨城県北茨城市あての物資買い付け（ボランティア、11名）
2011/03/23	【物資提供】茨城県北茨城市あての物資買い付け（ボランティア、17名）、茨城へ向けて出発
2011/03/24-03/26	【物資提供】茨城県北茨城市にて物資提供
2011/03/26	NPOみんつなと提携（陸前高田市）
2011/03/27	【物資提供】宮城県石巻市に向けてラジオを積んだ車両が出発⇒ラジオを提供
2011/03/30	【物資提供】岩手県陸前高田市あての支援物資の買い付けを開始、ともつな基金専用口座開設
2011/04/05	【物資提供】陸前高田市へ支援物資を発送（協力：名備運輸株式会社様）
2011/04/06	【物資提供】陸前高田市社会福祉協議会事務所、長部小学校、要谷避難所へ物資を提供
2011/04/11	【メディア掲載】京都新聞「支援金」協力呼びかけ
2011/04/14-04/16	現地調査のため、陸前高田市に、小川、鬼丸、栗田を派遣。
2011/04/18	東京にて活動報告会（ともつな基金）を開催（協力：株式会社毎日エデュケーション）
2011/04/29-05/15	臨時職員として、藤田崇文を雇用。遠野まごころネットに派遣。
2011/04/29	【物資提供】冷蔵庫 2 台、洗濯機 2 台を岩手県陸前高田市広田町太陽公民館（避難所）へ提供
2011/05/14	【調整】陸前高田市気仙町「和野会館」にて行われた、炊き出しをコーディネート（協力：名備運輸株式会社様）
2011/05/14	【物資提供】冷凍庫 3 台を、陸前高田市内のコミュニティセンターに提供（協力：名備運輸株式会社様）
2011/05/26-05/31	岩手県沿岸部に職員を派遣。下記、4つの活動を実施 1. 「遠野まごころネット」をはじめとする連携機関との打ち合わせ並びに調整 2. 被災地の状況及びニーズ調査 3. ウガンダからの支援物資の提供 4. テラ・ルネッサンス遠野事務所の開設
2011/06/14	【メディア掲載】京都新聞「復興リーダー役 育て」
2011/06/16	【物資提供】岩手県大槌町の金沢小学校（避難所）へ支援物資を提供（協力：宗教法人松緑神道大和山様）
2011/06/20	【調整】大槌町大ヶ口集会所にて炊き出しをコーディネート
2011/06/21	【メディア掲載】京都新聞「受けた支援『恩返し』被災者へ 広がる輪」
2011/06/21	【メディア掲載】河北新報「岩手・大槌 被災者手製 刺し子人気 布巾とコースター ネット販売へ着々」
2011/07/04	【調整】陸前高田市、大槌町の避難所にて、ボランティアカットをコーディネート（協力：ドラマア様）
2011/07/09	【調整】大槌中学校前テントにて、「おとなりコミュニケーション Live」をコーディネート（協力：Dew 様、小山田壮平様）
2011/07/14	【調整】大槌町中央公民館にて tayuta さんのライブをコーディネート（協力：tayuta 様）
2011/07/20	【調整】大槌町大ヶ口集会所にて行われた炊き出しをコーディネート
2011/07/26	【メディア掲載】中日新聞「働く喜び 被災女性に～内職、パート 再建へ一歩～」
2011/08/07-08/08	【調整】大槌町にて、タツ・オザワさんによる撮影をコーディネート（協力：タツ・オザワ様）
2011/08/09	【調整】大槌高校にて開催された、本間正人さんの特別授業をコーディネート（協力：本間正人様）
2011/08/12	【メディア掲載】雑誌いきいき 9 月号（発行：いきいき株式会社）
2011/08/12	【メディア掲載】京都新聞 「震災で失業「小さな雇用」から「仕事作ろう」浜の女性再起 京の NPO も一役」
2011/08/24	大槌復興刺し子プロジェクトの運営母体の本会への移譲を発表



遠野まごころネット



陸前高田市での炊き出しの様子



現地調査中の小川（左）と鬼丸（右）
場所：陸前高田市

【ともつな】大槌復興刺し子プロジェクトとは？ <http://osp2011.web.fc2.com/>

2011年5月、岩手県出身者2名を含む、有志5名で「大槌復興刺し子プロジェクト」が立ち上がりました。プロジェクトの内容は、大槌町で被災された女性の方々に、東北の伝統技術「刺し子」を活かした製品を作成していただき、対価をお支払いして買い取り、ウェブなどを通じて、その製品を販売するという行為を通じて、被災者の方には、自立のために働く機会を、被災地外の方には、製品を通じて、東日本大震災のことを忘れないでいてもらうというものです。

その製品の売り上げの一部を、本会が実施するともつな基金(本会の被災地支援活動)にご寄付いただくというご縁から、プロジェクトを運営するボランティア有志との交流が生まれ、話し合いを重ねる中で、大槌町以外でのプロジェクトの拡大、製品ラインナップの充実、広報活動の充実など、今後のプロジェクトの発展を見据えて、プロジェクト運営を、テラ・ルネッサンスが引き継ぐこととなりました。

本会が、カンボジアやウガンダなど、海外での支援現場で培ってきた、「一人ひとりに寄り添う支援」の姿勢を、本プロジェクトにおいても継続して実践してまいります。

会員の皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

●プロジェクト参加者インタビュー

刺し子を夢中で縫っているうちは、(地震に関する事柄・経験を)忘れることができます。何もせずにいると、あれこれ思い出します。何かすることがあると、心が救われるのです。無理のない範囲で刺し子が続けたいと考えています。

私たちは、ただ縫っているだけです。売ってくれる人がいないと収入にならないので、この事業を助けて下さる方々に感謝しています。何も仕事のない人たちは、「これからもずっと、このような仕事があるのかどうか」、それを一番考えています。この事業を、できるだけ長く続けてほしいというのが、大槌の人たちの願いです。

私は、助けてもらうばかりではなく、大槌の復興のために出来ることをしていきたいと思っています。(一兜 貴昭さん)



秋田桃子 (フェロー)

一昨年末から、会員の皆様のご支援をウガンダやカンボジアのプロジェクトへ活かすために、インターンとして京都事務所で活動してまいりました。

このたび「岩手」という被災現場で活動し、会員の皆様のご支援なしには当会の活動は成り立たないと、改めて実感しています。

「刺し子プロジェクト」受益者のお母さん方は、刺し子製品作成を通して自ら収入を得ることで、経済的のみならず、精神的な「復興」へ向けた兆しが確実に感じられます。

ご支援下さる皆様の想いを現地に届けるべく、邁進してまいりますので、今後とも宜しく願いいたします。



写真左より、秋田、吉野、関

吉野和也 (調整員)

私が東北に震災支援で引っ越そうと決めた理由は、4月9～10日に岩手県陸前高田市へ支援に行ったことがきっかけです。

そこで目にしたものは、団員の3分の1を亡くしたにも関わらず、地域のために奮闘する消防団の人たちでした。震災から一ヶ月ほどのあの頃、まだお風呂に入れず、自分たちも家族を亡くしながらも、なんとか地域の人たちをお風呂に入れてあげたい。そう言って、がれきから薪をつくり、お風呂を作ろうとしているところでした。

東京に帰ってから、いてもたってもいられず、勤めていた会社を4月末で退職し、被災地に入り活動をしていました。

私が活動できるのは、皆様のご支援のおかげです。心から御礼申し上げます。

関 貴広 (調整員)

初めまして。関貴広と申します。私は岩手県の大槌町で生まれました。家は代々豆腐屋を営んでいましたが、津波に流されたために廃業しました。

今までは物資での支援をしていましたが、自立に向けてのお手伝いをしたいと考えています。

テラ・ルネッサンスに参加してとても印象的だった事があります。何も無いところから、何をすることが現地の方のためになるのかを考えて、形にしていける。そのために、スタッフ全員で真剣に夜遅くまで話し合います。大変ですが、充実しています。

全力で取り組み、被災地の方のお役に立ちたいと思っております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

●遠野事務所スタッフ紹介

【カンボジア】地雷埋設地域の掘立小屋から希望の小学校へ

2011年3月より、バタンバン州バヴェル郡のプオ・ソクリアチ村にて、外務省の日本 NGO 連携無償資金協力による小学校建設を進めてきました。このプロジェクトでは、6教室の小学校校舎だけでなく、トイレ、雨水を貯める貯水タンク、教員用宿舎も同時に建設し、教員、生徒用机椅子、黒板を提供することで、地雷に汚染されているために開発の遅れた遠隔地における初等教育環境を整えます。

カンボジアの遠隔地の村では、小学校の校舎を建てても、教員が生活していく環境がなく、十分な給料がもらえないために、授業が行われないことも多くあります。校長先生でも1ヶ月100ドル程度、新卒の先生は、最初の3ヶ月間は研修期間として給料をもらえず、その後、30～40ドルぐらいの給料で生活していかなければならず、部屋を借りて生活するのも厳しいほどです。こうしたことから、まずは先生たちの生活環境を整えてあげることが、授業がきちんと行われるためには必要です。この村でも、バタンバンから派遣された2名の先生は、村人の家に泊めてもらいながら授業をしていました。新しい6教室の校舎が完成すれば、新たに4名の先生を派遣してもらい必要があり、今回のプロジェクトでは、教員用宿舎も校舎の近くに建設することにしました。

小学校の建設自体は順調に進みました。当初、雨によって道が悪くなり、建設資材が運び込めないことを心配していましたが、道が整備されたこともあり、本格的な雨季が始まる前に、資材を運び込むことができました。

これまで2教室しかない仏教行事用に建てられた掘立小屋を校舎替わりにしてきましたが、新学年の始まる10月から、新校舎で子どもたちが勉強することになります。また、6年生の授業を実施するスペースがなかったために、別の村の小学校へ通っていた子どもたちも、この村の学校で勉強できるようになり、村の約300名の子どもたちが、午前・午後の二部制で勉強できるようになる予定です。(江角)



建設中の新校舎（右）とこれまで校舎として利用されてきた仏教行事用の掘立小屋（左）



開校式を待つ6教室の新校舎



完成した教員用宿舎とトイレ

【カンボジア】みんなが安心して通える小学校を!!



地鎮祭の様子

この夏、カンボジアでは、株式会社トータルハウジング様のご支援により、オウ・チェット・プラム村にて、小学校建設を開始しました。また、この小学校を建設するにあたり、支援をくださった株式会社トータルハウジング様の代表取締役渡邊様らが建設現場を訪問していただき、私、吉田も現地駐在員の江角とともに同行させていただきました。訪れた小さな村の小さな小学校では、村長さんや村の大人、そして子どもたちが大勢で歓迎してくれました。現地を初めて目にし、壁もない小さな小学校と元気な子どもたちに会い、この地で子どもたちが安心して通える小学校の建設に携われることを誇りに感じました。開校は10月ごろを予定しています。(吉田真衣)

【カンボジア】地雷被害者家族を対象にした自然養豚支援

2010年11月から、バタンバン州カムリエン郡の村落開発支援を実施している村に住む地雷被害者7家族へ自然養豚の支援をしています。地雷被害者は、ご存知のように地雷事故により障害を負っています。重労働にならない方法で、作物の栽培や小作人としての日当による収入以外に、副収入を得られるものが何かあれば、生活は安定します。大きな土地を必要とせず、子どもでも面倒を見ることのできる自然養豚は、とてもいい方法でした。

●パン・ブンさん家族の事例 人懐っこい豚

ブレア・プット村に住むパン・ブンさんの家族は、地雷被害者の中でも特に厳しい生活を強いられており、村人に小さな家を借りて住んでいます。7人の子どものうち、長女は人身売買のブローカーに騙されてマレーシアに連れていかれ、上の3人の男の子はバタンバンの孤児院に預け、小さな下の3人の子もたちも、食べるものがないほど厳しい生活をしていました。

ブンさんの家族は、試験的に自然養豚による1頭の子豚の支援を最初にしました。この豚は、化学飼料などを使用した場合よりも成長が遅かったのですが、それでもとても元気に成長しました。何よりもこの豚は、非常に人懐っこい豚でした。豚舎に人が行くと、すぐに近寄ってきます。パン・ブンさんの8歳の男の子がよく面倒を見ていて、この子が豚の上に乗ると、餌を食べるのをやめて大人しくなるのです。この豚は、ある日、お母さんが市場へ出かけているときに豚舎から逃げ出したようで、帰ってくるといなくなっていたそうです。ところが、豚もすぐ自分から戻ってきたそうです。

残念ながら、この豚は、飼育を始めてから5ヶ月目のクメール正月中に、ブンさん家族の子どもの病気の治療費のため、緊急に売りに出されてしまいました。豚はまだ成長途中で、売りに出すには早かったのですが、家庭の緊急の出費のためではどうしようもありません。400,000リエル（約100ドル＝約7,600円）でした。

その後、4頭の子豚を追加支援し、飼育しています。ただ、借りている家の大家さんから、近く家を返して欲しいと言われているため、ブンさん家族はまた新しい住む場所を早急に探さなければいけません。ブンさん家族の生活はまだ厳しい状況が続きます。（江角）



パン・ブンさんの8歳の息子が乗ると豚は大人しくなる。



豚の様子を見るパン・ブンさん家族

【ウガンダ】新たな元子ども兵（第6期生）への支援を開始しました



苛酷な戦闘から逃れて、社会復帰に向けての取り組みを始めた元子ども兵たち（第6期生）

本年7月、新しい受益者となる、元子ども兵20名及び地域の最貧困層住民9名への支援を開始しました。

ウガンダ北部では、5年前の停戦合意以降、治安が安定し、戦闘に駆り出されてきた子どもたちの多くも、村や町に帰還しています。しかし、その一方で、反政府勢力（神の抵抗軍）は、隣国のコンゴ北東部や中央アフリカ、南スーダンに拠点を移し、同地ではいまだに襲撃や子どもの誘拐を繰り返しています。そして、その中には、ウガンダ北部で誘拐された子どもたちも、兵士として戦闘に加担させられています。先日も、その戦闘の中で、2名の子ども兵が亡くなったとの報告がありました。

今回新しく受け入れた子ども兵の多くは、コンゴなど隣国での戦闘にまで駆り出されて帰還したばかりの元子ども兵たちです。中には、その苛酷な戦闘の中で怪我を負い、その後遺症が残っている元子ども兵もいます。そのうち7名は、銃弾を受け、その破片が頭や足に残っており、手術を受けたり、痛み止めを飲みながら、社会復帰に向けて取り組んでいかなければいけないような状態です。

受け入れから3ヶ月近くが経ち、そんな元子ども兵たちも、読み書きの勉強や、洋裁や木工大工の職業訓練にも少し慣れてきました。彼ら彼女らの社会復帰への道のりは始まったばかりですが、2年後には、これまでの元子ども兵たちと同様、自分の力で生活を再建できるように支援を続けていきたいと思えます。（小川）

【ウガンダ】物価高騰にも負けず、収入の安定をめざす元子ども兵たち



テラ・ルネッサンスの社会復帰センターで共に訓練を受けた元少年兵と結婚することが決まり、仕事に励む第5期生の元少女兵。彼女はグループで洋裁店を経営し始め、夫は木工大工店を仲間と共に始めたばかり。

フルタイムの訓練を終えて、自分の力で収入を得て、自立に向けて歩み始めている第5期生の元子ども兵たちは、それぞれ、小規模ビジネスや洋裁店、木工大工店を、個人またはグループで運営しながら、少しずつ生活が安定するようになってきました。38名の元子ども兵のうち、30名はほぼ安定した収入を得ることができるようになっています。

一方で、ここ数ヶ月間以上、物価が急激に高騰していることで、彼ら彼女らの生活も苦しくなっています。この2ヶ月ほどの間に、食料品の価格も高騰し（砂糖の価格は倍以上に高騰）、今までと同じ収入では、子どもに栄養のある食事を与えたりすることも難しくなっている受益者もいます。ただ、これは元子ども兵に限らず、地域の住民すべてに共通する悩みです。現在、こうした元子ども兵や貧困層住民が、少しでも安定した生活を維持できるように、貯蓄グループを組織したり、相互扶助を促進することによって、リスクを回避できるようにサポートを続けています。

そんな中、うれしいニュースもありました。第5期生で共に1年半の訓練を受けた元少女兵と元少年兵が恋に落ち、結婚することになりました。これまで強制結婚しか経験のない、元少女兵の彼女にとっては、生まれて初めて心から愛する男性と結婚することができたわけです。今、2人は共に、社会復帰に向けてそれぞれ、洋裁、木工大工の仕事を始めています。子どもができれば、「もっと収入が必要になる」という現実が、2人にとっては逆に働く意欲を高めているようで、物価高騰という厳しい現実の中でも、前向きに日々の仕事に励んでいます。（小川）

【コンゴ】 テラ・ルネッサンス コンゴ事務所の開設に向けて

コンゴ民主共和国では、第二次世界大戦以降、最大の犠牲者（540万人）を出す紛争が起こりました。その中で、3万人以上の子どもたちが兵士として駆り出され、20万人以上の少女や女性が性的暴力の犠牲となりました。そして、現在も、軍隊から解放され帰還した元子ども兵や性的暴力を受けた女性たちは、精神的、身体的な傷を負っていることが多く、生活を再建することが非常に困難な状況です。

そんな状況下、テラ・ルネッサンスでは、2006年より現地のパートナー団体（GRAM）と協力して、コンゴ東部の南キブ州において、紛争後の平和構築を進めるための事業を行ってきました。特に、2009年以降は、南キブ州カロンゲ区域の12ヶ村で、元子ども兵や性的暴力を受けた女性、孤児ら約700人を対象に、BHN（人間としての基本的なニーズ）を満たすための支援活動を続けています。

しかし、コンゴ東部は、世界で最悪の紛争被害を被ったにもかかわらず、世界中の「関心」が集まらず、活動に十分な資金も集まっていません。このような状況を鑑みて、テラ・ルネッサンスでは、コンゴ事業の充実を図るため、現地事務所を開設することを決定しました。（小川）



写真左より、小川、テオフィー、トシャ 鬼丸

本年8月、鬼丸（当会創設者）と小川（当会理事長）、吉田（海外事業担当）、トシャ・マギー（コンゴ事業担当）の4名が、GRAM代表のテオフィーと4日間にわたるミーティングを重ねて、資金調達が整い次第、コンゴ東部南キブ州の活動拠点としての事務所を開設することを決定。

●インターン生が見たウガンダ

8月5日から20日までの15日間、京都事務所勤務のインターン生3名がウガンダ事務所を訪問しました。

回収事業を担当している宗盛千枝です。普段は、皆様が送ってくださった書き損じハガキや使用済みインクカートリッジの管理や、支援者さまへの報告書作成などを行っています。

現地では、第5期生のインタビュー調査を行いました。基礎教育を終え、実践でビジネス訓練中の彼らにインタビューする中で、最も印象深かったエピソードがあります。それは、インタビューしたほとんどの受益者に共通するもので、彼らが決まって口にした言葉です。それは「職を得たことで家族を養えるようになった」「子どもを学校に行かせることができるようになった」という、家族に関する言葉です。彼らのキラキラした表情から、経済的に自立した喜びと、家族を養えるようになったことへの自信を感じました。家族を守る強さ、自信を持って生きる眩しさを彼らから学んだ今回の渡航でした。



ウガンダの子どもたちと一緒に
（写真左より、宗盛、子どもたち、向畑）

啓発・物販事業を担当しております向畑です。私は英語がまるでしゃべれないのですが、今回ウガンダ視察に同行させていただきました。

自分の目で見ると、肌で感じるアフリカの大地は、とても広大で、力強い生命の息吹を感じました。そこで生きる人々もまた、同じく強い『生』への輝きを放っていました。どんなに辛い過去を持ち、今なお過酷な状況にあっても、大切な家族や、愛する人の笑顔を守るために、前向きに働く彼らの姿に、私は圧倒されました。

ウガンダではかけがえのない経験を沢山させていただきました。このような機会を与えて下さった日本事務所や現地事務所の職員の方々、そして当会をご支援下さっている皆様にとっても感謝しています。

●インターン生が見たウガンダ（続き）

広報を担当している上田です。私は、支援の場を五感で感じる事を目的として、ウガンダ事務所を訪れました。

現地では、ビジネスを開始して半年経つ5期生へのフィールド調査（家庭訪問）を行いました。その中で大変印象に残ったことは、「守る人（家族）がいることの強さ」です。生徒たちは、金銭面や健康面で日々大変困難な状況に直面しているにも関わらず、家族を養っていくために、テラ・ルネッサンスで身に付けた技術を使って、前向きに、稼げる事に感謝して、働いていました。私たちと何ら変わらない、むしろ私たちよりたくましく生きている彼らの姿を見て、同じ人間としてチャンスは等しくあるべきだと感じると同時に、忘れがちになってしまっていた「感謝することを忘れず、精一杯生きていくこと」を教えられました。

今後は、ウガンダ研修で学んだたくさんの事を生かして、広報として皆さんに現地の様子や当会の活動を発信していくよう努めていきたいです。



ウガンダ事務所スタッフと一緒に

●インターン生紹介

はじめまして、同志社大学3回生の吉田百合香と申します。この夏休み期間、コンソーシアム京都のインターンシッププログラムを通して、インターンシップ生として活動に関らせていただいております。どうぞよろしく申し上げます。



立命館大学4回生の古岡繭と申します。2月からインターンを始め、現在、広報を担当しています。皆様に多くの情報を発信し、テラ・ルネッサンスの活動や、取り組んでいる問題について知っていただきたいと思います。

●鬼丸以外の講師も大活躍、講演依頼募集中

8月18日、枚方市立中央図書館で、枚方市の平和事業の一環として、平和講演会「ぼくは13歳 職業、兵士」（講師：栗田佳典）が開催され、当日は、年配の方から親子連れの方まで、約40名の方々にご来場いただきました。

講師の栗田からは、当会の活動紹介、カンボジアにおける地雷の被害やウガンダにおける子ども兵の現状とそれらに対する当会の取り組み、活動に対する思いなどが語られ、参加者の皆さんがとても熱心に耳を傾けていただいていたのが印象的でした。また、講演会の後には、ウガンダの主食であるポシヨ（とうもろこしの粉を練ったもの）＆ビーンズの試食体験とウガンダコーヒーの販売が行われ、多くの方々にウガンダの食に触れていただくことができたほか、地雷や子ども兵に関するパネル展示も開催され、多くの方々に地雷の被害や子ども兵の現状について知っていただく機会となりました。

テラ・ルネッサンスでは、現在、講演依頼を募集しています。お問い合わせは、テラ・ルネッサンス事務局（075-645-1802）までお願いいたします。（吉田百合香）

<編集・発行>

特定非営利活動法人テラ・ルネッサンス

〒612-0031 京都市伏見区深草池ノ内町 5-23-105

TEL&FAX : 075-645-1802

E-mail : contact@terra-r.jp

http://www.terra-r.jp



ポシヨ&ビーンズ。
テラルネのウガンダ
社会復帰センターで
は、給食として食べ
ています。



講演会の様子